■研究調査レビュー

島尾敏雄の南島論

廣瀬　晋也（鹿児島大学法文学部）

本論は，島尾敏雄の南島論を論究するにあたっての，島尾の関連文献資料の概観と予備的考察をめざすものである。

1．南島，琉球弧，ヤポネシア

島尾敏雄には評家によって「南島論」「南島エッセイ」と総称される多くの文章がある。南島に関する評論，随想，書評，講演記録，研究・調査報告ほか諸様式にわたる。島尾の南島論形成過程にあって，これへの示唆，影響を与えた，あるいは相関する営為として，近代以降の「南島」をめぐる柳田國男，谷川健一，吉本隆明ほかの諸言説があるということは指摘されているところであるが，島尾自身は「南島」の圏域をどう想定し，「南島」にむかうその基本的な姿勢はどのようなものであるか。たとえば島尾は次のように述べている。

「並びつづいた多数の島嶼。（中略）私は小学生のころから薩南琉球の列島に救いを求めていたのかも知れない。本州島は私にとって単調な退屈な場所でしかなかった。そのどの部分に行ってみても単一の生活感情がわだかまっていて似たような服装と平板な言葉でおさえつけられている，というふうにしか感じられなかった。しかし私は日本国をのがれることを為し得ない。とすると私たちには同じ国家の中において多彩な異なった要素で混交しぶつかり摩擦し合う興奮を経験することは，遂にできないのだろうか。（中略）私の視点は次第に南西諸島にしぼられて行った。

九州島の南端と台湾島の北端の間に連なるこの島々の存在の見事さはどうだろう。地理付図の紙面から潮騒とおやみなき風のざわめきがわき上り（おそらく三弦の音はそれらのざわめきの抽象であろう）一種の寂寥にひとはひしと襲われるに違いない。それは孤独な点在ではあるが，ただそれだけでなく私にとってはむしろ興奮である。日本国にとってほとんど唯一の，内に含める異郷である。私は南西諸島を思うときに私の気分が豊饒になることをとどめ得ない。」（「南西の列島の事など」，「朝日新聞」西部版，1956・1・6）

1955年10月の奄美移住後，間もないころの島尾の文章である。

上記の文章からうかがえることを概括すれば，島尾の南島への視線が，いわゆる外部の視線から内部（から）の視線へと転換していること〔注1〕，言語や文化を島尾固有の問題と個人をこえた「国家」の問題との相関においてとらえ，南島を「本州島」「九州島」との差異性としての文化や言語の多様性，豊饒を生み出す源泉とみなしていること，南西諸島を花綵列島という形状としてだけでなく，九州南端から台湾に連なる南西アジア〈交通〉の弧状の脈路とする視点があることなどである。

島尾における「琉球弧」，「ヤポネシア」の構想が萌芽のかたちで示されていることがわかる。

島尾が奄美群島，琉球諸島ほかをふくむ南西諸島に言及する際に「琉球弧」という語自体を使用したのは，すでに指摘されているように〔注2〕，「奄美の妹たち」（「読売新聞」1961・5・23）における「『琉球弧』といわれる奄美から沖縄，先島にかけての南島」の用例が初めてであるが，島尾はこれ以前の南島論における諸論述において，「琉球弧」の語は

使っていないものの，これら島嶼を地理的，歴史的，文化的に固有の，かつ多様な拡がり，連なりとして個別的に，同時に総合的にとらえるという視点を提起している。島尾のいわゆる「南島」は圏域としては〈琉球弧〉の拡がりへと発展，深化していったわけで，言語，文化，歴史，風土にかかわる独自の「『南島』という概念」（「アマミと呼ばれる島々」，「南海日日新聞」1959・1・5）を形成する過程で，その「南島」を想定する呼称として，本来，地理学の用語であった「琉球弧」の語の有効性に到達したのである。島尾の南島へのまなざしは，当初から「離島」，「『孤島苦』」，「離島苦」（「奄美群島を果して文学的に表現し得るか？」，「奄美新報」1956・1・1，5，6）という現実や，「本土」に対する「周辺」（「日本の周辺としての奄美」，「中部日本新聞」1960・7・8）など地理的・歴史的側面に焦点を合わせるとともに，島々の「個性」（「アマミと呼ばれる島々」），固有性，「孤絶のすがた」（「南の島での考え」，NHK鹿児島放送，1959・8・30，放送）という個別の位相にとどまることなく，その視野は，戦中体験の地，加計呂麻島からそれをふくむ在住の奄美大島へ，奄美群島から沖縄，先島諸島―「アジアの東のはて太平洋の西の極みのところに横たわっているひとつらなりの島々のつながり」（「われわれのなかの南」，「南日本新聞」1958・1・8）―へとひろがるものであった。このような島々の「つらなり」をとらえる視線は，〈俯瞰〉のそれではなく（「海や陸や島々などを一眸のうちに眺め尽すことはできない。しかし私たちは小学校教育以来地理付図や色々な地図の類を見なれて来て，自分の住んでいる日本国の格好を頭の中に描くことができる。あたかも天界からの俯瞰が可能ででもあるかのように。」，「南西の列島の事など」），奄美移住後の生活と思索のなかで形成された〈感受〉と想像力の視線である。

「『南島』の島々」を「ひとまとめにつかむ」ことによって「われわれが所属している『日本という世界』の成り立ち」を理解し，「『日本という世界の一つの区域』」として考えたい（「南の島での考え」）という姿勢である。島尾は「奄美の島々も，沖縄の島々にもそして八重山や宮古の島々も含めた『琉球』の，いいかえればつまり『南島』の素顔を発見したときに，私は蘇生させられる思いがする」（同）という。南島に本土の文化的古層との差異とそれ以上に相似を見いだし（「日本の周辺としての奄美」），その混沌とした多様性を島尾個人の精神の「蘇生」，のみならず日本の文化への賦活につながるものとして，これを「南島の治癒力」とよぶ（「南島について思うこと」，「南日本新聞」1959・5・10～7・10，断続掲載）。

「ヤポネシア」は島尾の造語である。「ヤポネシア」についての岡本恵徳の詳細な考察〔注3〕にあるように，この語が初めて見えるのは「ヤポネシアの根っこ」（『世界教養全集21』「月報　第15号」，平凡社，1961・12）における表題および，本文中，千島弧，本州弧，琉球弧の「三つの弓なりの花かざりで組み合わされたヤポネシアのすがたがはっきりあらわれてくるだろう。そのイメージは私を鼓舞する」や，「沖縄や先島を含めて（中略）その区域をひとまとめにしていう適切な名称を見つけにくいが（琉球と表現するのはひとつの意見だ）その地帯にヤポネシアの根っこが残っていると考えることは大きな見当はずれではなかろう」の箇所である。島尾がこの語について初めて解説を加えたのは，「私の見た奄美」（鹿児島県大島郡市町村議会議員研修会での講演，1962・6・13。のち同『島にて』，冬樹社，1966・7）においてである。

「南太平洋にはポリネシア，ミクロネシア，メラネシア，インドネシアの島々がありますが，それと同じように，南太平洋のひとつの島々のかたまりとして私は，日本列島があるのだという気がするのです。それで，自分でヤポネシアという名前をつけてみました。（中略）南太平洋の島々の生活には，それら

の島々に適した生活がおこなわれているのであって，そういう意味において，ポリネシア，インドネシア，ヤポネシア，メラネシア，ミクロネシアなどの同じような生活をする島嶼群があるのだと考えたらどうかと思うわけです。」

「私の見た奄美」において，島尾はこのような提言をし，同時に，「日本の場合は大陸に近かった」から「文明という点ではやはり大陸の方が先んじていて，それが日本には早くはいって来ましたので，ほかの南太平洋の島々の生活とだいぶ様相がちがって来たのではないだろうか」とも述べている。

島尾はヤポネシア構想を展開することになった契機として，以下のような点をあげる。一つは，戦中の前線基地指揮官としての加計呂麻島体験，および本土復帰後，奄美群島復興特別措置法のもと，1955年よりの奄美在住の経験を通して，本籍地の福島を介したところでの東北と琉球弧を対応させて日本を相対化する視点を獲得したこと，二つ目には，柳田國男『海上の道』（1961年刊）における〈海上の道〉という発想からの示唆によって，海上交通路としての島嶼に対する近世以来の呼び名である「道之島」の意味，すなわち統治と砂糖政策等，政治，経済の側面のみならず，「道之島」をふくむ琉球弧の「文化の道筋」，つまり「本土」への「文化がはいって来るルート」としての「象徴」性を再確認したこと，三つ目は，「日本の歴史の中心を動かすようなかかわり合いのなかで，ただし若干悲劇的なかたちにおいて，いつも犠牲にさせられる，なにかそういうふうな，日本の文化の中にエネルギーを注入するのは，南のほうからであるのに，注入した結果，日本になにか安定ができあがると，離れの辺境あつかいをして仲間に入れてくれない，というくりかえしがあります」といういらだちを反転させ，「奄美，沖縄の南島地帯」を「拠点」にして，「ポリネシアとかミクロネシア，メラネシア，インドネシア」と日本との「比較研究」をすることによって日本文化や「日本の素性」を「はっきりさせ」たいという問題編成にたどりついたことである。「私の見た奄美」におけるこうした考え方は，のちの「回帰の想念・ヤポネシアー沖縄・奄美・東北を結ぶ底流としての日本」（「中国」第78号，1970・5によるインタビュー。のち，部分的に字句修正のうえ『ヤポネシア考　島尾敏雄対談集』葦書房，1977・11に再録）における「ヤポネシアの発想ですか，これはやはり奄美に住むようになって思ったことです。（中略）東北と奄美・沖縄を両端の視野に入れた何かそういう世界を考えることができると思うのです。（中略）大陸の方ばかりに目を向けて，本土で中央集権を作ってきた，そういうものが中心の日本的なものがあるわけでしょう。もちろん，それも日本だけれど，もっと底流するところで，東北もあるんだし，琉球弧もあるんだし，ということを思いつき，まあヤポネシアというふうなことを言ってみたんです。（中略）そういうふうに考えると，解放されるのです」という発言でもくりかえし表明される〔注４〕。

四つ目には，なによりも，島尾における日本の文化，社会の「単一」性（「私の見た奄美」），画一性に対する違和感，そこからの「解放」（「回帰の想念」）としての南島の多様性，独自性へのあこがれがある。すなわち，島尾が「ヤポネシアと琉球弧」（「海」1970・7）で「何かこう固い画一性がある（中略）日本からどうしても抜け出そうとするなら，日本の中にいながら日本の多様性というものを見つけていくより仕方がないんではないか。（中略）多様性を持ったいろいろな地方の中でもことに強く独自性を持った地方が琉球弧であり東北ではないか」と記す，その「多様性」，「独自性」から生じる「エネルギー」と「治癒力」が日本・本土に，というよりそれ以前に島尾自身に「解放」や「蘇生」（「南の島での考え」）をもたらし，彼を「鼓舞」（「ヤポネシア

の根っこ」）する。このことを島尾は「北方への郷愁と南へのあこがれ」の「共存」（「われわれのなかの南」）と記しているのである。

2．島尾南島論概要，および主要参考文献

島尾文学に関する各解題，書誌，著作目録等に記載された島尾著作を参照すると，南島論関連の文献は初出以降，以下の評論，随筆集の単行書に収録されていることがわかる。

『離島の幸福・離島の不幸－名瀬だより』（未来社，1960・4），『非超現実主義的な超現実主義の覚え書』（同，1962・6），『島にて』（冬樹社，1966・7），『琉球弧の視点から』（講談社，1969・2），『夢の系列』（中央大学出版部，1971・11），『南島通信』（潮出版社，1976・9），編著『ヤポネシア序説』（創樹社，1977・2），『名瀬だより』（農山漁村文化協会，1977・10）がある。

これらの著書所収の南島論は，前後して以下の集成，全集に再録されている。『島尾敏雄非小説集成』第１巻「南島篇Ⅰ」（冬樹社，1973・2），同，第２巻「南島篇Ⅱ」（同，同・4），同，第３巻「南島篇Ⅲ」（同，同・5）。

『島尾敏雄全集』第16巻「南島エッセイⅠ」（晶文社，1982・11），同，第17巻「南島エッセイⅡ」（同，1983・1）。

さらに，全集刊行前後に刊行された評論，随筆集に『南風のさそい』（泰流社，1978・12），『過ぎゆく時の中で』（新潮社，1983・3），『透明な時の中で』（潮出版社，1988・1）があり，これらにも南島論関連の作品が収録されている。

ほかに島尾の対談集で南島への言及があるものに，『内にむかう旅　島尾敏雄対談集』（泰流社，1976・11），『ヤポネシア考　島尾敏雄対談集』（葦書房，1977・11），『平和の中の主戦場　対談集』（冬樹社，1979・7）があげられる。また，前記『ヤポネシア序説』にも対談が収録される。

島尾の南島論は著書（「あとがき」），雑誌・同人誌，新聞，官報，講演記録，ラジオ放送原稿，叢書の「内容見本」等に初出ののち，また他著者刊行物に寄せた「跋」，「あとがき」として初出ののち，上記，単行本初収を経て同，上記『非小説集成』，『全集』に再録されることになるのである。ほかに，全集以後発表の南島関連の旧対談記録として，屋冨祖仲啓編集「新沖縄文学」71号「特集　島尾敏雄と沖縄」（沖縄タイムス社，1987・3）所収のものがある。

島尾の南島関連著作に対する「南島論」「南島エッセイ」という呼称であるが，その〈論〉や〈エッセイ〉というくくり，それ自体はゆるやかなものである。本論の冒頭にも記したごとく，島尾の南島に関する論は評論，随想，書評，講演記録などさまざまな文学様式・形式のものによって構成される。随筆，感想のほか紀行文のなかでも南島の歴史，文化，言語，風俗，自然への論及があり，内容的に様式としての評論，随筆，紀行等と，いわゆる〈論〉とが渾然と一体化している。前記『島尾敏雄非小説集成』第１巻「南島篇Ⅰ」，同，第２巻「南島篇Ⅱ」，同，第３巻「南島篇Ⅲ」，また，前記『島尾敏雄全集』第16巻「南島エッセイⅠ」，同，第17巻「南島エッセイⅡ」では，いま述べたような意味での，島尾の諸様式にわたる著作のうち，主たる内容，素材，主題，問題設定が南島関連のものを「南島篇」「南島エッセイ」として収録しているのであるが，これはあくまで〈南島篇・エッセイ〉であって，収録作品のなかには〈南島〉論，あるいは〈論〉といったくくりにはなじまないものもあると思われる。また，『島尾敏雄非小説集成』には同，第４巻「文学篇Ⅰ」（同，1973・6）～第６巻「文学篇Ⅲ」（同，同・10）があり，『島尾敏雄全集』には第13巻「文学エッセイⅠ」（同，1982・5）～同，第15巻「文学エッセイⅢ」（同，同・9）があり，これらの収録作品のなかには「南島篇」や「南

島エッセイ」に収録してもよいと思える作品もある。

ここで前記，対談をのぞく島尾の南島論の概要は，上記『島尾敏雄非小説集成』第１巻「南島篇Ⅰ」～同，第３巻「南島篇Ⅲ」，および『島尾敏雄全集』第16巻「南島エッセイⅠ」，同，第17巻「南島エッセイⅡ」をもとにまとめれば，以下のようになる。

まず収録作品数は，「南島篇Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」に119編，これと重複する収録作品をのぞき，「南島篇」以後発表された作品で「南島エッセイⅠ，Ⅱ」に収録された作品数は40編，計159編〔注５〕である。また，前記，全集前後刊行の『南風のさそい』，『過ぎゆく時の中で』，『透明な時の中で』各所収の南島論関連文で重複作品を除く編は計30編である。以上の編のなかには，前述のように〈南島〉関連の〈論〉＝南島論とはみなしがたい文章も若干あるが，ここでは「南島篇」「南島エッセイ」所収の159編に前記３冊所収の30編を合わせた総計189編を〈南島論〉として見ていく。

各編の初出紙誌の内訳は次のとおりである。新聞（82），雑誌（37），自著，他者編著書の単行本，同，跋，月報，解説，推薦文，内容見本等（45），自治体会報，月報，広報，機関誌等（７），研究会報（４），講演，ラジオ放送等記録（５），鹿児島県立高等学校図書館月報，生徒会誌等（３），鹿児島県立図書館報，県図書館協議会だより（２），短期大学会誌（１），その他（３）。初出は新聞掲載が多く，「南海日日新聞」，「南日本新聞」，「西日本新聞」，「大島新聞」，「沖縄タイムス」，「琉球新報」など地元新聞への発表が目につく。

次に南島論各編の内容を項目にしてあげれば以下のとおりである。

沖縄の歴史，風土，文化，伝統芸能（９），那覇滞在の心境，沖縄の現状（８），奄美の歴史，奄美研究の現状（４），奄美の自然，風物，生活，交通，文化，風習，言語（22），奄美，名瀬の現状，在住，それ以後の感慨（23），奄美と文学（２），南島の視点，または表題に南島（12），紀行，戦中体験（５），追悼文（３），鹿児島県立図書館奄美分館関連（６），離島の生活，風習，伝統芸能（７），奄美，南島関連著作への書評，解説，あとがき，編集後記等（50），軍政下の名瀬（２），ヤポネシア構想，表題にヤポネシア（４），東北と奄美，中央と周縁（２），奄美と沖縄と本土，歴史的，文化的背景（３），琉球弧という問題提起，表題に琉球弧（17），文明論，現代文化論，その他（10）。

奄美，南西諸島を主題・内容とする論考各編が多数をしめる。南島論の主軸が奄美，沖縄，琉球弧であることが確認できる。また，奄美，南島関連著作への書評，紹介，新刊案内などの文章が多いことも目につく。奄美，沖縄ほかの南島地域の文化，文学の掘り起こし，評価への島尾の関心がうかがえる。

次に，島尾の南島論に対する論評をふくむ著作，論文，あるいは，いわゆる南島関連著作の一部を主要参考文献として，以下に掲げる。

谷川健一「〈ヤポネシア〉とは何か」（初出，「日本読書新聞」1970・1・1）ほか（島尾敏雄編『ヤポネシア序説』創樹社，1977・2）
松岡俊吉『島尾敏雄論』（泰流社，1977・10）
奥野健男『深層日本紀行　ヤポネシア史観の形成へ』（毎日新聞社，1978・10）
飯島耕一「南島論を読む」，川満信一「未来の縄文－『ヤポネシア論』の示唆するもの」，大城立裕「ヤポネシア論の宿題―方言のアイデンティティーをめぐって」，岡本恵徳「私にとっての琉球弧」，新川明「琉球弧と島尾敏雄」（「カイエ」12月臨時増刊号，「総特集・島尾敏雄」1978・12）
藤井令一『ヤポネシアのしっぽ　島尾敏雄の原風景』（批評社，1979・12）
岩谷征捷『島尾敏雄論』（近代文藝社，1982・8）
川満信一『沖縄・自立と共生の思想　「未来の

縄文」へ架ける橋』（海風社，1987・2）
関根賢司「琉球弧のなかのヤポネシア論」（「新沖縄文学」71号「特集　島尾敏雄と沖縄」1987・3）
与那覇恵子「『ヤポネシア論』素描」（「現点」の会編「現点」2号「特集　島尾敏雄」1983・10）
對馬勝淑『島尾敏雄論　日常的非日常の文学』（海風社，1990・5）
岡本恵徳『「ヤポネシア論」の輪郭　島尾敏雄のまなざし』（沖縄タイムス社，1990・11）
石田忠彦「島尾敏雄論－南島論の文学性－」（「活水日文」第22号，1991・3）
堀部茂樹『島尾敏雄論』（白地社，1992・3）
高良勉『琉球弧（うるま）の発信―くにざかいの島々から』（御茶の水書房，1996・4）
石田忠彦「島尾敏雄あるいは一国二制度論」（「文学批評　敍説　XV」「特集　検証　戦後沖縄文学」1997・8）
鈴木直子「島尾敏雄のヤポネシア構想－他者について語ること－」（「国語と国文学」第74巻，第8号，1997・8）
花田俊典「ヤポネシアのはじまり－島尾敏雄の『日本』地図－」（「日本文学」VOL.46，1997・11）
小倉虫太郎「メタ・『南島』文学論　『トシオ』と『ミホ』の間から見えてくるもの」，東琢磨「きっかけとしての『ヤポネシア』」，新川明「幻の雑誌『琉球弧』のこと」，田仲康博「他者の眼差し」，仲里効「ネーションとネシアの汀」，高阪薫「島尾文学に見る『ヤポネシア』の萌芽と形成」（「ユリイカ　詩と批評」「特集　島尾敏雄」1998・8）
鈴木直子「一九六〇年代の沖縄表象と島尾敏雄の『ヤポネシア』」（「神奈川大学評論」第34号，1999・11）
佐藤泉「ヤポネシア論の位置」（島尾敏雄の会編『島尾敏雄』鼎書房，2000・12）
藤井令一『島尾敏雄と奄美』（まろうど社，2001・11）
高阪薫「島尾文学と奄美・加計呂麻島―『出孤島記』にみるヤポネシア的発想」（「甲南大学紀要　文学編128」2003・3）
安達原達晴「『魚雷艇学生』と〈南島〉の発見」，鈴木直子「シマオタイチョウを探して－『ヤポネシア論』への視座－」，西尾宣明「都市の表象と『ヤポネシア』構想－『家の外で』『帰魂譚』の言説，あるいは島尾文芸の一九六〇年前後－」，岡本恵徳「那覇とラビリンス」，花田俊典「ヤポネシアの終わり－谷川健一の功罪－」，高阪薫「ヤポネシア論の可能性－『もう一つの日本』の行方－」（高阪薫・西尾宣明編『南島へ南島から　島尾敏雄研究』和泉書院，2005・4）
Barnaby Breaden「『根っこ』序説Ｖ－南島論と夢－」（「九大日文　06」2005・6）
（その他，南島論関連）
吉本隆明，赤坂憲雄，比嘉政夫ほか「第１回『文芸』シンポジウム　琉球弧の喚起力と南島論」（「文芸」1989・2）
吉本隆明「南島論」（「文芸」1989・8），同「南島論　二」（同，同・11）
谷川健一『南島文学発生論　呪謡の世界』（思潮社，1991・8）
末次智「『南島論』と『奄美学』の往還」（「日本文学」VOL.54，2005・6）

〔注１〕花田俊典「ヤポネシアのはじまり－島尾敏雄の『日本』地図－」（「日本文学」VOL.46，1997・11）は「南西の列島の事など」から，ほぼ同じ箇所を引用して，「戦後製」の日本地図を見ながらの島尾の感慨，すなわち「南西諸島」が「孤独な点在」として映ずる，と同時に「日本国」の「不毛の画一性からなんとか抜け出したい」という「個人としての情動そのもの」を指摘する。

ほかに，鈴木直子「島尾敏雄のヤポネシア構想－他者について語ること－」（「国語と国文学」第74巻，第8号，1997・8）は，島尾のヤポネシア論に，「奄美沖縄に

おける歴史文化あるいは表現の独自性を見出しそれを積極的に評価」し，「従来までの中央志向の日本を相対化する」主張を指摘する。

〔注２〕高良勉「事項篇」「琉球弧」の項（島尾ミホ・志村有弘編『島尾敏雄事典』勉誠出版，2000・7）。

〔注３〕岡本恵徳『「ヤポネシア論」の輪郭　島尾敏雄のまなざし』（沖縄タイムス社，1990・11）。ほかに岩谷征捷『島尾敏雄論』（近代文藝社，1982・8）の指摘など。岡本恵徳は島尾のヤポネシア論の展開につき，「国を構成する枠組を問う『国家論』に視野を拡げ」，「地域の自立性や独立性を強調する方向」への，また「中央」と「東北」と「琉球弧」という「『日本』という『国』」の「三つの部分の関係」の「構造化」への深化をいう。

島尾の南島論に対する分析と評価については，ヤポネシア論の「対象地域の範囲設定」につき考察した對馬勝淑『島尾敏雄論　日常的非日常の文学』（海風社，1990・5），南島論の「文学性」という視点を設定し，考察した石田忠彦「島尾敏雄論－南島論の文学性－」（「活水日文」第22号，1991・3）の先駆的な論考，また参考文献にかかげる関根賢司，仲里効，田仲康博，高阪薫，西尾宣明ほかの示唆に富む考察がある。

〔注４〕立松和平はこの部分を引用し，「ヤポネシアという美しい言葉（中略）には中央集権のヤマトに対し，ヤマトから見れば辺境の地からの存在証明の思いがある」（『島尾敏雄事典』「事項篇」「ヤポネシア」の項）とのべる。

〔注５〕「二つの追悼文」（「南日本新聞」1957・5・22，1959・6・5）は２編とし，「名瀬だより」（「新日本文学」1957・5～1959・1），「南島について思う事」（「南日本新聞」1959・5・10～7・10），「那覇日記」（「沖縄タイムス」1978・2・5～4・16）など連載のものは，それぞれ１編に数える。